今月のことば　　令和4年（2022）10月　<No.194>

“たましい”の往く末

坊やのお父さんはくり返し言われました。「こんなことなら、自分がもっと遊んでやればよかったのに…」と。「三年保育のはじめの頃なんて、柱にしがみついて嫌がっとるのに、無理矢理スクールバスに乗せたりしたんですよねェ…。保育園に行っとるわずかの時間も、今から思えば ともにしてやれなかったのが悔まれます。」

そうなんですね。先立たれてみると誰しも、「ああもしてやりたかった、こうもしてあげたかった」の想いがこみあげてきますよね。筆者とて同じ。早くに逝った父を想うにつけ、当時の自分の無力と、かえって逝く人のほうが遺る者たちに“済まん、済まん”と言い続けられた姿を思い浮かべるのです。

『臨床仏教学のすすめ』大村英昭 著 より

身近な方を見送るのはつらい体験です。それが大切な方であるほど、生きている間にしてあげられなかったことへの後悔の念が押し寄せてきます。そんな時は、**亡き方の「たましい」の行く末を真剣に考えてみる**ことが大切であると、大村英昭師（元筑紫女学園大学学長）は言われます。手がかりとなるのは、宗祖をはじめとする先達のことばです。

（仏教では、実体としての「魂」は否定します。しかしここでは、**「亡き方のたましい」＝「遺された者にとっての、亡き方のかけがえのなさ」**として語られています。）

亡き方はいったいどこへ行ったのか、いつか再び会うことはできるのか…？ 親鸞聖人の**「かならずひとつところへまゐりあふべく候 （必ず“浄土”という一つところに、私たちもまた、参ることでしょう）**<親鸞聖人御消息>」という言葉が響いてきます。

かけがえのない人の「たましゐ」の往く末を、“あい済まん”の気持ちで案じたことのない人たちには、なるほど「お浄土」なんて、ただの絵空事。どう説明したところで弱き者らの幻影に過ぎないということになるのでしょう。…

亡き人に対して“あい済まん”の思いを募らせるほどに、…特にいつ頃からとは申しませんが、**かけがえのない人の「たましゐ」の行く末を本当の意味で案じる限り、僕自身もまたそこへ往くしかない**“そこ”のところがほのかにわかるようになりました。

亡き親を、亡き子を、亡きつれあいを想うとき、「浄土に往きたい」ではなく、**「私も同じところに往くしかない」**といただく。そのような人々の想いが積み重なって、お念仏は受け継がれてきたのではないか、と思います。大きな悲しみの中にも、心の落ち着き先があるのがお念仏の救いです。

慧日山 真光寺